

実践報告書

広島県立広島皆実高等学校
(教諭・伊藤 里奈)

本実践（研究）のポイント（高校教育指導課指導主事 宮本洋子）

本実践は、訪問看護師が訪問時に何をするだけでなく、看護師が訪問しない時間にも目を向けることが、生活を見る視点となることを気付かせるよう工夫された授業実践となっています。

また、事例の活用や在宅場面のスライド写真の提示や、グループワーク等の対話を通じて思考を深め、代表者が実際に利用者の部屋に訪問した様子をリアルタイムの動画を活用することで、生徒は興味・関心を持ち在宅で暮らす対象者の理解を深め具体的に思考することができるよう工夫がなされています。

1 はじめに

在宅看護を行う場合は、多様な療養者と家族等が医療的処置などを安全に実施できるよう支援するとともに、生活の場における個々の療養者の状況に応じたリスクマネジメント、在宅療養者と家族等の生活の質の向上に向けた支援について理解する必要がある。学習を通して、在宅療養者の健康課題に対して、生活の質の向上を目指し、保健医療チームの一員として主体的かつ協働的により良い看護実践を目指して自ら学び、実施する援助とその根拠を明確にして、課題を解決する力を育てることが必要である。

2 問題の所在

在宅で暮らす対象者の理解を深め具体的に思考するため、実際の在宅訪問の場面を設定して、在宅訪問について身近に感じる機会とした。その際、ICTの活用やグループワークを行い、意見を共有し学びを深めさせたい。また、訪問看護師は、療養者の在宅での生活を知り、生活に直接関わる援助も提供する役割を担っている。訪問時に何をするだけでなく、看護師が訪問しない時間にも目を向けることが、生活を見る視点となることを気付かせたい。在宅で暮らす対象者の生活を把握するための視点を生徒自身で考えることで、より主体的に自律した学習を行うことに繋がると考える。

3 具体的な取り組み

- (1) 事例とスライド写真を提示し、利用者の部屋の様子から読み取れる生活状況について整理させた。
- (2) 利用者の現在の生活状況と、その状況から予測されることを個人で考えさせた。
- (3) グループで情報を共有・整理し、これから実際に部屋を訪問した際に確認が必要な項目について、意見をまとめ、発表し共有させた。
- (4) 代表者が実際に利用者の部屋に訪問し、気づいたこと・確認したこと、利用者とのやりとりについて、代表者以外の生徒と画面共有し訪問場面を共有した。
- (5) さらに違う視点で、次の代表者が利用者の部屋に2回目の訪問をし、さらに利用者とロールプレイをすることで、気づいたこと・確認したことを代表者以外の生徒と画面共有し訪問場面を共有した。
- (6) 本時の目標とはじめの発問、最後のまとめの発問より本時で学んだことを整理できるように取り組んだ。

4 成果と課題

実際の在宅訪問の場面を教員が対象者として演じて再現すると共に、写真の提示や実際に訪問させリアルタイムの動画を活用することで、生徒は興味・関心を持ち在宅で暮らす対象者の理解を深め具体的に思考することができていた。生徒の学びとして「訪問時の限られた時間で、観察やコミュニケーションを通して、利用者さんの価値観や生活状況を把握していくことが大切であると学んだ。」「病棟とは違う、在宅での観察の視点について学ぶことができた。」等記述している。このことから今回の学習目標を達成することができたと考える。課題として、他者との意見の共有や意見交換ができる時間の確保、思考する内容を整理し目標を明確にする時間の確保が必要であった。このことにより、生徒自身がさらに考えを深めることができ主体的に自律した学習を行うことに繋がると考える。

5 おわりに

今回の授業を通して、在宅看護の役割と機能として訪問時に何をするだけでなく、看護師が訪問しない時間にも目を向けることが、在宅で暮らす対象者の生活を把握するため必要であることについて理解することができた。今後も、効果的な指導方法や教材を工夫し、生徒が知識を統合させ、主体的に学び看護実践能力の向上を図ることのできる授業づくりに取り組んでいきたい。